



午睡前幻想郷

僕の心は傷つきやすい

僕の心はとても傷つきやすい。人が知れば仰天する程に僕の心は繊細だ。それも会社の上司に軽く叱られたり、同僚から茶化されただけで、ウジウジと一週間はその事をひきずり、さらにその一週間のうちにも僕は些細な事で傷つき、ほぼ毎日をウジウジしている、それくらいの傷つきやすさだ。

今の会社に就職した当初、こんな僕の脆い性質を知った社内人間は散々僕をネタにして弄り続けてきた。僕はその事にも一々傷ついた。だが最近では僕の反応にも慣れたのか以前に比べ馬鹿にされたり『うるさい』と怒鳴られる事も少なくなった。僕はこの職場にやっと馴染めたのだと嬉しい実感を抱いていた。

――だがそんな僕の毎日は僅か三ヶ月で終わりを迎えた。遠まわしな言い方で上司から自主退職を勧められたのだ。職場に馴染めたと思っていた分だけ、僕のショックは大きく、帰宅途中でとうとう自殺を考えた。

だが死ぬ前に、僕にはどうしてもしておきたい事があった。毎日帰宅時に立ち寄るコンビニでバイトをしている泉さんにせめて一言、何か伝えておきたかったのだ。

泉さんは十八歳くらいの儂げな印象の女の子で、レジに立つ様子がまるで迷子のようにだった。僕は何度も泉さんの顔を見ているうち彼女を好きになっていた。

いつもの時間に僕はコンビニに入った。もう何も恐れる事はないのだと覚悟を決め、いつものようにレジに立つ泉さんの前に出た。

「あの――」なるべく自然に話しかけようとする、泉さんは客の僕を無視して、「あ！ カックン！」と大声で叫んだ。それまでの迷子の顔が明るくなり、僕は思わず彼女の視線を追った。そこには長身で金髪の若い男が立っていて、泉さんの瞳を捉えていた。

「お前んちでずっと待ってるのも飽きたから」

「今日は一時間遅くなるって言ってたじゃん。もうちょっと待ってよ」彼女の声が甘い。話の内容から見てもこの男が泉さんの彼氏なのだと僕は理解した。その瞬間、何も恐れる事のないはずの僕の心が砕けた。

「なに？ 何か割れた？」驚く泉さんに対し金髪男は「そうか？」と、特に気にした様子もない。それでも泉さんは、「でもガシャンって、凄い音したよ」と金髪男に不安を訴えた。そして泉さんは囁くように「なんか、気持ち悪い」と呟いた。再び僕の心は砕けた。

磁器の茶碗が割れるような音が店中に響き渡る。二度目で音源がはっきりしたのだろう、店内にいる人間の視線が全て私へと集まった。

泉さんが心底気味悪そうに僕を見ていた。金髪が泉さんの前に出て僕を睨み付ける。泉さんが男の背中に隠れ、三度目の音。今度は小皿の割れるような音だ。それに反応して彼女が悲鳴を上げる。

「このヒト気持ち悪い！」そして、繊細なガラス細工が砕け散るような音がこだまし、それきり静かになった。

――そう、僕の心はとても傷つきやすい。あの音の源は僕だ。僕の脆い心が壊れる音なのだ。

僕は弁当をレジに置いたまま、逃げるようにコンビニを去った。

本音を言えば僕は泉さんに告白がしたかった訳ではない。ただ何か一言でいい、やさしい言葉をかけて欲しかった。そうすれば、また生きて行けると思ったのだ。結果としてそれは僕の心への決定的なとどめとなった。すぐに死のうと僕は決意した。

しかし次の日の朝、自殺する筈の僕の姿は勤め先の職場にあった。なぜかあの夜以来、僕は思いのほかポジティブな思考ができるようになっていた。恐らく泉さんのあの言葉で砕け散ったのは僕の心ではなく、僕の弱い心の殻だったのだ。そして、蝶のように僕の心は脱皮した。そう、僕は鋼鉄のような強い心を手に入れたのだ。

それからの僕は何物にも傷つかない強い心を持つ無敵の男になった。どれだけ上司に叱責を受けても同僚から馬鹿にされても、何の痛痒も感じない。あとは恋人でもいれば文句はないが、一生独身だとしても問題はない。仕事の方はウジウジ悩む時間が消えた分、以前より遥かに捗るようになった。

「うるさい！」

また上司が僕を怒鳴りつけた。今日はこれで四度目だ。彼は新しい環境にまだ適応できないらしい。

「その音、前よりずっと耳障りなんだよ！」

当然の事だ。僕の心は鋼鉄の心になったのだから陶器やガラスの音などする訳がない。強く、何物にも動じない金属音を発するに決まっている。僕は返事とばかりに鋼鉄の心をガキン！ と鳴らすと、怒りで顔を紅潮させる上司を鼻で笑い仕事に戻った。そのうち本当に解雇を言い渡されるかもしれないが、それも今の僕には取るに足りない事だ。

<終>

『え』

駅前の広場で七時。

『例のサイト』を通じて自称20歳の大学生と会う事にした。

遠目から品定めされて逃げられるのは御免なので、僕は髪型と服装を完璧に整える。

それからゴムをふたつ用意　これが無ければ話にならない。

七時。相手を探す必要はなかった。その姿は遠くからでも一目で分かる。

羽織袴に刀、そしてちょんまげという僕と同じ格好。

相手は僕を見つけると出し抜けに言った。

「曲者じゃ！　出あえ出あえ！！」

すると、駅前のいたるところから侍や忍者、

鎧武者までが何十人も現われて僕へと殺到した。

「寄らば斬る！」

僕はゴムの刀で襲い掛かる彼等を片っぱしに斬り捨てた。

何度も練習を重ねた殺陣は往年の高橋英樹のように鋭く、

侍や忍者や鎧武者は大仰に叫んでバタバタと倒れてゆく。

総勢50人を斬り伏せ、最後に悪代官の20歳大学生をぶった斬る。

彼は最高にイイ声を出してくれた。

そして僕は長七郎江戸日記の里見浩太郎ように、

くるりと回って刀を納め、うっとりした。

そう、僕が利用したのは有料『出あえ系』サイト。

この快感のためなら幾らでも貢いだって構わない。

<終>

「啓太、ごはん冷めるわよ！ いい加減降りてらっしゃい！」

階下からまた母の耳障りな声が響いて、いつものように俺はいらいらと声を上げた。

「うっせえな、クソババア！ ぶっ殺すぞ！」

今いいところなんだ、部屋に入って邪魔なんかされようものなら本当にぶん殴ってしまいそうだ。

俺の怒声に気圧されたのか、母はそれから何も言ってこなかった。

俺はテレビの前に座っていた。照明を落とした暗い部屋のなかでぱちぱちと切り替わるその明かりだけが部屋を玄妙な色に染めている。

俺はいま一般的に言う美少女ものと呼ばれるゲームにのめりこんでいた。五つのルートに分かれた女の子のシナリオの最後、俺の大のお気に入りであるシズクちゃんのルートのクライマックスにいた。

複雑な操作のいないゲームではあったが、コントローラーを握る手は汗に濡れていた。彼女の言葉の後につなげる選択肢を間違えると真のハッピーエンドには繋がらないのだ。実際に恋愛など一度もしたことのない俺にとって、このゲームに登場する女の子との淡く純粹で切ない恋は、俺の寂しい現実を忘れさせてくれる清らかさがある。彼女たちは皆優しく俺を慰めてくれた。それに比べれば生身の女など騒がしくうす汚い動物に過ぎない。俺は心からこの二次元世界に住む少女達に恋をしていた。

シズクちゃんのイベントは佳境に入っていた。二人きりで過ごす夜、濃密で甘い空気が漂う。しかし、このシズクちゃんに先走りは厳禁なのだ。恋愛感情を素直に認められない彼女の過去のトラウマを考え、俺は現れた三つの選択肢のうち「キスをする」が点滅しているカーソルを慎重に外した。そして、「ただそこにじっとしている」を選択する。するとシズクちゃんの態度がやっとなやわらかなものになる。選択は正解だった。

俺は深い息をついて流れるテキストに目を走らせた。

――しかしそこで思わぬ邪魔が入った。

「啓太！ お前、いい加減にしろよ！」

父の声だった。階段をぬしぬしと上ってきた父は俺に向かって怒鳴り声を上げた。

「家でゲームばかりしやがって、お前少しは将来のこと考えてるのか！」

父は俺の部屋の前まで来るとドアを何度も殴るように叩いて言う。

「お前今年で23だろうが！ いつまでこんな生活続けるつもりだ！？ いざその気になって働こうたって、何年も無職だった人間を雇うほど社会は甘くないんだぞ！ 分かってるのか！」

……俺は父の話の内容にではなく、父の声でゲームの音声をかき消された事に真から怒っていた。大事な恋の最中、現実の横槍を入れた邪魔者に俺は自分でも驚くような叫びを上げた。

「うるせえクソ野郎！！ 邪魔なんだよ！ 出てけ！ ボケが！」

そう叫ぶと俺は手の中にあったコントローラーを投げ捨ててドアを思い切り蹴り付けた。いつにないあまりの剣幕に父も思わずたじろいだのか、
「もうどうなっても知らんぞ！」
と捨て台詞じみた言葉を後に階段を下りていった。

そうさ、現実なんて本当にくだらない。俺は二次元の世界に生きたかった。うるさい親に兄貴をバカにする生意気な弟、俺を見下したかつての友人達。こんな弱いものが虐げられる夢の欠片もない世界より、シズクちゃんたちが慰めてくれる世界で暮らしたかった。二次元の世界は楽園だ。俺は床に捨ててられたコントローラーを手にとると再びTVモニターに向き直った。

しかしそこにあったのは今までのシズクちゃんの写真ではなかった。奇妙な光がモニターから溢れまるで架け橋のように俺の元にまで伸びていた。

「シズクちゃん？」

それは幻聴だったのか。俺の耳は「こっちにおいでよ」という愛するシズクちゃんの声を感じたのだ。俺は光の橋に足を踏み入れた。光の向こうは二次元の世界なのだ。こんなくそったれな現実ではない楽園だ。この世界に一切の未練がなかった俺はモニターの中に駆け込んでいった。

しかし光の中の世界は俺の想像していた楽園とは少し違っていた。どこを捜してもシズクちゃんがないのだ。何かが違う。だが目の前にはロングの黒髪が美しい少女がいた。ああ、よかった。俺は彼女との淡い恋愛をこころゆくまで楽しんだ。そして少しだけ唇が触れるような淡いキスのあと、彼女が頬を染めながら

「後ろを向いてて、お願い。恥ずかしいから……」

そう言って俺を促した。これだ、これなんだよ。俺は有頂天な気分を隠さずすぐに後ろを向いた。

――そして俺の頭に何かがぶつけられた。やたらと重たい物で殴られたようだ。激しい痛みと頭蓋骨に虫が湧くような感触にのた打ち回っている俺を、黒髪の少女が恐ろしい笑顔で見下ろしていた。

何がなんだかわからない。一体俺はどこに来てしまったんだ？　ここは楽園じゃなかったのか？

混乱する俺の意識は徐々に遠ざかっていった……。

「お邪魔しまーす」

「はい、どうぞ」

「お兄さんの部屋のドアが開いてたけどお兄さんいなかったね？」

「いない。あいつ外出なんて殆どしなかったんだけどな」

「ふうん。……それで、今何やってんの？」

「ノベルゲーのつづき。今はバッドエンド埋めてる最中」

「バッドエンドってあと何個あるの？」

「95個かな」

「そっちはほどほどにしてこっちのゲームやろうよ」

「ああ、それ。ゾンビから逃げるやつね」

「二次元最高とか言ってたるけど、こうして一緒に遊んでくれる彼女は二次元にはいないよね」

「……まあ、三次元最高かな。 よっしゃ、あと94個」

<終>

――頬に冷たいものを感じた。僕は眼を細めてうっとりとした。

「…ひゃっこいよおヒカルちゃん」

暑い夏のさかり、クーラーのないこの部屋では冷たいものなら何でも大歓迎だ。冷蔵庫でじっくりと冷やされた彼女の肢体は僕の身体の隅々まで涼を運んでくれる。

ヒカルちゃん。僕は彼女にそう名づけた。悪友のひとりが僕の誕生日プレゼントに贈ってくれた彼女は元々別の商品名がつけられていたが頭部にプリントされたアニメチックな顔が好きなキャラクターに似ていたためその子の名前をつけていた。頬を赤らめた、やさしい笑顔だった。

元々が『そういう』目的のために作られた彼女だったが、人間として決定的な何かが失われる事を恐れていた僕はその行為に及んだ事はない。

しかし悪友たちには僕のそんな言い分には端から耳を貸さず、僕の顔を見るたび彼女との仲を離し立てた。僕と彼女はまったくのプラトニックな関係だったのにだ。彼等が笑うたびに僕はいちいち憤慨して悪友らに抗議した。

外は相変わらずの大雨だ、強風で木々が大きく揺れている。気象予報によると大きな台風が接近中で、現在では大雨暴風警報が発令されているらしい。

でも僕にはそんな事は関係ない。僕はヒカルちゃんの冷えた乳房に頬をすりつける。はふう、と艶かしい溜め息が出てしまう。

至福だった。ヒカルちゃんの身体は樹脂製のためにぷよぷよと柔らかい。猛暑にほてった僕の身体は彼女の冷えた肉体に包まれてようやくその熱を放出する。

真っ裸の男が女の子の人形に身体をくっつけてもだえている。人が見たら大変な誤解が生むだろうが猛暑の中だ、それも仕方ない。

冷たいヒカルちゃんの身体を存分楽しんでいる僕に次第に眠気がやってきた。

「しあわせだよお、ヒカルちゃん……」

僕は幸福な気持ちのまま眠りの世界へと吸い込まれていった。

――誰かが大声で何かを叫んでいる。その口調に危機感があったことに、この時の僕は気付かなかった。僕はヒカルちゃんを腕に抱いたまま邪魔者から逃げるように寝返りを打ち、また深い眠りへと落ちていった。

ヒカルちゃんに宿っていた冷氣はもう完全に抜けていて、彼女の身体は生暖かく僕の汗でべとべととしていた。

「あつっ、あついよ！」

なんて不快さなんだろう。目が覚めると僕はまるで事後さっさと女を捨てるように彼女の身体を突き放した。ベリベリと肌と樹脂が引き剥がされる。……その時彼女の笑顔が少し曇ったように見えたのは気のせいだろうか。

しかし暑い。まるで蒸し焼きされるようだ。僕は窓から風を入れようと彼女をそのままにベッドを降りた。

その時、ばしゃっと僕の膝が水に濡れた。その感覚で僕はやっと一大事に気が付いた。部屋があたり一面水浸しだったのだ。

大型の台風が接近中……。大雨暴風警報……。

僕はやっと思い出した。夢の中で誰かが訴えていたのだ。あれは僕の住むアパートの脇を流れる川が増水中で住民の避難を呼びかける警報だった。

大変なことになった。とりあえず状況を確認しようと部屋のドアを開けた。しかしそれは間違いだった。内開きドアが開け放たれると一斉に物凄い水量の水が流れ込んできた。部屋の中の水は一変に増水して僕の腰の高さまで上がってくる。ガシャンと窓が割れてまた水が入ってきた。

絶体絶命。僕は溺れ死ぬ事に戦慄し、身震いした。

……その時、プカプカ浮いていたヒカルちゃんが僕の背中にくっついてきた。

『私を使って！』

そう言っているようだった。確かにヒカルちゃんにはパンパンに空気が入っている。浮き袋代わりになるかもしれない。

「ええい！」

覚悟を決めてヒカルちゃんに跨ると僕は部屋を飛び出した。

丁度その頃、お昼に放送中の報道番組では台風の影響にとる河川の氾濫を実況中だった。「増水中の近賀河上空から中継です！ 現在河の水位は上昇中で近隣にも大きな被害を与えています。床上浸水は百軒以上、避難民は500名を越えています」

その時、中継の女性アナウンサーが何かに気づいた。

「あ、ちょっとカメラさんこっち！ 河の中流に男性がいます。流されています！ なぜか裸のようです。着衣はどうしたんでしょう。男性は何かにしがみついているようですね、浮き袋でしょうか？ カメラさんズームして下さい……もっと、もっとです。――あ、あれは！ ……ああ……」

「池上さん？ 近賀河上空の池上さん？ 池上さんどうしました？」

<終>

優しい週末

夫が里帰り中の私と独身の弟が身軽だった事もあり、両親の誘いを受けて週末は久方ぶりの帰郷となった。その日の夕食が鍋に決まると私と弟が買出しに行く事になった。

近所の商店街は昔のまま時間が止まっているかのようだ。

何鍋にするのか聞く弟に、私は「すき焼き」と決然と答え、材料を指で数えながら商店街を歩いてゆく。

肉屋で肉を買い、八百屋で白菜を求める。

「もしかして、江藤君？」

弟が春菊を手にとっていた所で、八百屋の女性が恐る恐る聞いてきた。

「智美ちゃん？」

誰？ と私が耳打ちすると弟は小声で「高校時代の同級生」と答えた。

「久しぶり」

「うん。結婚したって聞いたけど……」

「今は独身。母が寝込んでしまってね、こうして店を手伝ってるのよ」

二人の空気から事情を悟った私は「先に行ってるからね」と気を利かせて買い出しを続けた。

商店街ではどの人も優しく、暖かい。陽気な挨拶に笑い声。嘘くさいと思いつつ半分では安心する。

弟が追いついたのは私がアーケードを出る頃だった。

「色々おまけしてくれたから、今夜のすき焼きは豪勢だな」

「あんたは智美サンと一緒にだと思ってた」

「いや、家族団らんが一番だろ」

嘘くさい事を真顔で言い、弟は両手一杯の荷物を振り回す。私もそれを真似てみる。

買い物袋を振り回しながら、私は家族にはなれなかった夫の事を考えた。

「みんな良い人だよな」

「うん」

「莫迦だよな。全部が終わる直前になって優しくなろうだなんて」

「うん。バーカ、バーカ！」

「姉ちゃんもバカだ、このバーカ！」

超新星爆発によるガンマ線バーストは間もなく地球に到達するという。愛する誰かを傷つける事になっても最後はいい人間として終わりたい、悪い事ではない筈だ。

これから家に帰って、私達は両親と鱈腹すき焼きを食べる。そして、思い出話を沢山して。それから、それから――。

もう子供に帰ってしまおう。幼い頃のように何も考えずにふざけあいながら私は弟と懐かしい家路を辿った。

<終>

――父と最後に話をしたのは、もう十五年も昔の事だ。

あの当時、父の元を離れて一人暮らしを始めた俺は、まだ自分の都合しか考えられない子供でしかなかった。そして父の方も、俺との別れが長いものになる事を理解していながら、俺を止める事もなくただ送り出す事しかできない、くたびれた中年男に過ぎなかった。

最後に見た父の、悲しみとも怒りともつかぬ曖昧で濁った表情を心から軽蔑し、俺は長く暮らした実家を後にした。二度と帰っては来ないつもりだった。

十五年を経た今の俺の顔は、おそらくあの時の父と似ているのだろう。だからこそ今、俺は父と話がしたかった。

しかし顔を合わせて話など、もう俺たちがそんな事をできる筈がない。それには父も共通する思いでいたのか、電話による会話を求めた俺の手紙に、父は許諾を記した簡素な葉書を送って返してきた。

過去には、こうやって何度か父と手紙のやりとりをした事がある。就職できた事、結婚した事、そして娘が誕生した事。父はそれに対して返書を送ってきた。父の書く文章は簡潔で短く、それだけに真心を思わせるものがあつた。

しかし一度も父と顔を合わせていない妻としては、年に一度もない書簡の往復だけでは満足などできる訳がない。「お義父さんには正式なご挨拶がしたいんだけど」 そんな妻の希望を俺は拒絶し続けた。親父と妻を会わせるなんて、考えただけで背筋が寒くなった。妻としての筋を通したい彼女は娘が産まれた事を切欠に更に根気強く俺にせがむようになったが、やはり俺は首を縦には振れなかった。親父は実は前科者で、周囲には危ない奴がいっぱいいるんだよ。そんな下手な嘘まで考えて妻子から父を遠ざけようとしたがそんな努力もむなしいもので、根気よりも妻の愛情が尽きる方が早かった。娘が三歳になった年の事だ。

妻には他に男が出来、その男からプロポーズさえ受けていた。事情を知った俺はすぐに離婚届を用意して判を押した。思い返してみても自分が悪いのは明白だった。四年近くも一緒に居ながら俺は最後まで彼女に心を許さなかったのだから。しかし娘の遥香がそんな俺と一緒に暮らしたいと希望した事は意外だった。幼心に父親が哀れに思えたのか、「どうしてパパと暮らしたいの？」と聞く俺に遥香は、「だって、パパさみしいもん」と涙まで浮かべて見せ、俺は思わず嗚咽しそうになった。しかし、年端も行かない娘の希望は叶うことなく娘は妻に連れられて俺の元を出て行った。それからの数年の事はあまり憶えていない。

だが今から三年前に妻が急死して、娘が再び俺の元に帰って来た。それから俺の時間はもう一度針を刻み始めた。

――実家の電話番号は昔と変わっていなかった。俺は携帯のボタンをゆっくりと押し、少し息を吸い込む。ダイヤル音が五度ほど鳴ってから「もしもし」という男の低い声がした。

「……父さん」

十五年ぶりに俺は父を呼んだ。父は少しうろたえたように黙り、その後「崇志か」と呟くように応えた。

ぎこちない挨拶のあとで互いの現況報告の応酬が続いた。本題を切り出すタイミングを掴めない俺は、娘の成長を話題に使う時間稼ぎをしていた。だが相手は父なのだ、そんな小細工などいつまでも通用する筈がない。

「崇志」

父は更にむなしい言葉を重ねようとする俺を制止した。

「話したい事があるんだろ？」

内心で俺はほっとした。実を言えば、俺は父のその言葉を待っていたのだ。迂遠な会話もすべて父に覚悟させるための小細工だといっていい。俺は息を吐いて、少しずつ心の奥底に潜んでいたある言葉をたぐり寄せた。

「父さんはいつからだった？ 俺は十歳の頃からだった」

「……うん、俺もそれくらいだったかな」

二百キロを距離を隔てていても声を交わせば意思はすぐに通じた。そしてその奥で待っている一つの報告も父には通じているのだろう。だから、これらの会話に深層的な意味などほとんどありはしない。だが俺の心に一定の整理をつける為には決して除く事のできない儀式といえた。

「最初は、誰かの怒る声とか泣く声とかが聴こえたんだ。誰の声だろうと思って辺りを見ても騒いでる人なんていないだろ？ 俺は耳がおかしいのかって思ったよ」

「ああ、俺もそんなもんだった」

「それが、体がでかくなるほどに声の数も量も増えて行ってさ、俺やっと気付いたんだよな。全部、他人の考えてる心の声なんだって」

「……ああ」

「全部聴こえちゃうんだ、父さんの声も母さんの声も、全部さ。母さんが家から出てった理由も、全部だよ」

父は黙りこんだ。だが俺は構わずに続けた。

「それまで澄み切ってたと思ってたものが全部濁ってる事に気付いたんだ」

あとは感情の奔流のままに言葉をぶつけるだけだった。ここまで父に声を出して本心を吐露した事は始めてだった。一緒に暮らしていた頃は言葉などに意味はないと信じていたのだから。

「父さんはもう父さんじゃなくなったし、友達も誰一人いなくなった。誰も信じられる人間なんていない、女房だって――」

そこから先は言葉にできなかった。父に聞かせるにはあまりに惨かった。だがそれも父の深いため息を聴けば伝わっている事がよく分かる。とうとう泣く事しかできなくなった俺は十五年ぶりに声を交わす父に向かって子供のようにしゃくりあげ、泣き声をあげた。父はその間ずっと黙っていた。

「……ずっと一人で、よく耐えてきた」

やっと口を開いた父に、俺は電話では本来分かる筈のない頷きで返した。

「で、遥香ちゃんの事は……？」

「……そうだよ」

娘の遥香に異変を感じたのは、妻と別れた際、娘が俺についてゆくと言った時だ。あの時、あの子は「パパさみしいもん」と言った。「さみしそう」ではなく「さみしい」だった事に俺の胸は激しく騒いだ。まだ幼稚園にも通っていない幼子のこと、言葉の間違いなどは日常茶飯事だ。だが俺の不安は確かに的中していたのだった。妻の死で親権が再び俺に戻ったとき娘はもう小学生になっていて、時折俺の方を意味深に見つめる事が多くなっていた。最初はその事を本人も戸惑っていたようだが、ここ一～二年で自分に起こっている異変の意味を理解し始めているのは確かだった。そしてそれは日を待たず、彼女に大きな傷を与える事になるだろう事も明白だった。ちょうど、彼女の父親と祖父のように。

「父さん」

「なんだ」

「遥香の父親として、俺はもういない方がいいのかな？」

自分が経験した事をそっくりそのまま娘に味わわせるのは無残でしかなかった。

「俺はここまで経って、やっと父さんと話ができるようになった。だけどそれも、長い間恨みや憎しみで破裂しそうな毎日を生きてきた結果なんだよ」

「ああ」

「でもまだ娘は小学四年生なんだよ、あまりにも酷じゃないか。父親と母親の離婚の真相を知ったり、俺が実際にはどんな人間なのかを知るなんて」

俺はまたここで涙が滲み、声に詰まった。そんな俺を諭すように父は言った。

「崇志、お前『濁ってる』って言ったよな。澄み切ってたものは全部濁ってた、って」

俺は再び黙ったまま頷いた。

「もしかしたら世の中に澄み切っているものなんて本当に何一つないのかもしれない。でも、濁ってるものの中には真実のひとかけらもないのかな。お前は幼いうちから色々なものを聴いて、世界に裏切られたような思いで生きてきたろう。なら、どうして結婚なんかしたんだ？ 遥香ちゃんを産んだんだ？」

「お前はそれでも信じたかったんじゃないか？ 濁ってる全ての中にもひとかけらの真実があるんじゃないかって」

それは父親ではなく、長年の戦友のような言葉だった。

「確かに、俺は母さんとはうまくいかなかった。理由はお前も知っての通りだ。お前も、残念ながらそうだった。でも、遥香ちゃんまでが同じ道をたどるとは限らないだろう？」

しかし……。現実を考えれば世の中には腐った奴などうんざりする程いる。そんな人間に心をズタズタにされる娘の姿など想像したくはなかった。だがその思いを読んだ父が言う。

「だったら、遥香ちゃんを山奥に隠すか？ 誰とも関わらせずにこれから先たったひとりで生きさせるのか？」

それも余りに残酷な人生に思えた。

「なあ崇志、俺とお前が今までの人生で学んだことを、遥香ちゃんに教えられないか？ これから直面する現実はどう立ち向かうのか、教えてやれないだろうか」

父の心情は痛いほどよく分かった。だが俺にはまだ踏ん切りがつかない。

「教えるのはいいさ。でも俺は、毎日を100%父親ではいられないよ。色んな事を考えるさ、春香には聴かせたくない事だっていっぱいあるんだよ、それが全部……。俺だって、遥香の知られたくない事を知ってしまう」

「……ちょうどお前が出て行ったようにな。でもそれもまた濁りなんじゃないのか？ 100%信頼できる親でいる事は難しいよ、でも100%を軽蔑される人間でいる事もまた難しいとは思わんか？

俺はね崇志、お前の言う濁りをこそ遥香に信じさせてやりたいんだよ」

――父の提案は結局保留のまま、俺は話を終わらせた。だが十五年ぶりに聴いた父の声は、あの唾棄し、憎み蔑んだあの頃の父とは少し違うものにも感じられ、俺は不思議と心地よい疲労感に浸っていた。

電話を切った時にはもう夜も深く、娘は風呂を済ませてさっさと自分に部屋に籠っているようだった。ドアの向こうから邦楽の軽いリズムが聴こえてくる。

先ほどの父との会話を遥香にも聞かせようと思い娘の部屋のドアの前に立ったものの、俺は結局その勇気が搾り出せなかった。

一度踏み出してしまうえば、そこはもうやり直しの効かない一方通行の道だ。俺にはまだ遥香の能力が開花しきっていないうちに普通の親子らしい生活を送っていたいという欲もあった。だがドアの向こうから届いた娘の「ねえ、お父さん」という声から俺の迷いはある方向性を与えられる事になった。

「水の中の生き物ってね、棲む水が綺麗すぎると生きていけないんだって」

うん、と応えたが俺には娘の次いで来る言葉で既に目頭を熱くしていた。

「逆にね、水は少しは濁ってたほうが魚とか生き物が多く棲んでるんだってさ」

「……そうか」

俺は精一杯それだけを言うと、ドアを離れた。

これから俺は父に再びの電話を入れる。

遥香の現状の意思は確認できた。だがこの先の問題は山積みで、きっと娘は俺や父が直面してきた苦悩と立ち向かわねばならないのだろう。そしてその度にこんな風に娘の事で父と話す時間は増えてゆくのだろう。

父と俺は十五年という時間を経て少しは和解できたのだろうか。それについてはもう答えは出ていた。後は、いかにその澄み切ることなき人間の濁りを見つめられるかという事だ。

そして、その事が娘の将来を少しでも明るくしてくれる事を祈るばかりだった。

<終>

飯田橋さん

「――此乃方さんって彼女いないんですか？」

彼女からの意外な質問に俺はすっかり慌ててしまい、

「そんなのいません！」

思わずそう大声で叫んでしまった。まるで少年漫画の様な軽率さに赤面する俺へ彼女、飯田橋さんは、

「そう？ 此乃方さんってモテそうなのに」 そう言って微笑んだ。

毎日橋を渡る時に彼女と挨拶を交わす事が楽しみになっていたが、その一件以来俺はすっかり舞い上がってしまった。

飯田橋さんは朗らかで人の事を気遣える優しい人だ。俺の心は飯田橋さんの事で一杯になっていた。やがて俺は彼女を食事に誘おうと決心した。

朝、いつものように橋で飯田橋さんと挨拶する。

「今日も暑いですね」

「本当に。お仕事頑張って下さい」

「はい。此乃方さんも気をつけて！」

会話は自然だった。こんな調子で何気なく食事に誘うのだ。

その日の仕事をなんとか片付け、ようやく帰路に就いた。

橋の袂に到着すると彼女の姿は遠くにいてもよく分かる。カットソーから覗く白い手が夕焼けに反射して眩しい。手を振って彼女を呼んだが、遠すぎるのか彼女は気付かない。俺は彼女の手の上を歩き、髪の毛の良い匂いが届く肩まで登ると、

「飯田橋さん」 ともう一度彼女を呼んだ。

そう、彼女は橋。身長15メートルを超える「橋族」の女性なのだ。

「ああ、此乃方さん」

声に気付いて振り向いた飯田橋さんの大きな瞳が俺を捉える。怖気付くなよ、と俺は自分を励ましながらか話を切り出した。

「あの、もしよかったら今夜、俺と食事に行きませんか？」

「――えっ」

明らかな動揺が見られた。……駄目か、そう諦めかけた瞬間

「私、なんかで良いんですか？」 彼女が俯きがちに呟いた。

「そうです！ 飯田橋さんが良いんです！」

今度はミスではなく、確たる意志をもって叫んだ。しかし、まだ何か言い難そうな顔をする飯田橋さんに向こうの橋から

「良いじゃないか、シオリちゃん。ここは私が見とくから、行っといで」 と気の良さそうな橋族のおじさんが援護射撃してくれた。

「ありがとう水道橋さん。じゃあ、あの、此乃方さん……。よろしくお願いします」

そして、俺を肩に乗せたまま飯田橋さんは河を遡っていった。河上には自然公園があって、街の夜景が臨める丘の上には巨大なサンドイッチと給水塔に入れたコーヒーを用意してある。夜のピクニックというのもまた乙なものだろう。

河をのぼってゆく飯田橋さんの横顔にはまだ少しの戸惑いが見られる。

これから告白をしようとしている俺の思いはもしかしたら儚く散るのかもしれない。だが俺に後悔はなかった。少なくとも俺は大きな大きな恋をしたのだから。

<終>

午睡前幻想郷 Siesta Fantasia

<http://p.booklog.jp/book/42037>

著者：雨森

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rainforest714/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42037>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42037>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.